

## ボランティア活動における高齢者グループの学習の様相と 学習における高齢者個人・グループの変化

堀 田 かおり (群馬大学大学院保健学研究科)  
石 丸 美 奈 (千葉大学大学院看護学研究科)

**目的:** 高齢者グループのボランティア活動における学習の様相と学習による高齢者個人・グループの変化を明らかにし、ボランティア活動における高齢者グループの学習の支援のあり方を検討する。

**方法:** 居住する地域で定期的・継続的に相互交流のあるボランティア活動を行っているグループの高齢者12名を対象に活動での交流や継続による変化、活動の意味等について半構造化面接調査を行った。

**結果:** ボランティア活動における高齢者グループの学習は、【接し方の工夫によるメンバー・支援対象者との関係の構築】を試みながら【高齢者の健康とQOLの向上を目指す方針】をもとに、【メンバー・支援対象者との活動内容の相談】や【支援対象者からの学び】を通して【活動の中で心掛けている考え方】や【活動の質を向上させる知識・技術・ツール】等を共有することで、やがて〈支援者・支援対象者の関係を越え、一緒に取り組む相手と認識する〉ようになり、活動を【自分にとっての居場所】や【学びを継続できる場】、【今後の人生に影響を与える活動】、【地域における支え合いの関係の構築】と意味を見出す過程であった。

**考察:** 学習が発展する過程においては、活動の意味を見出すことが重要であり、学習における3つの要素の拡大と意味を見出すことを支援することにより、高齢者のWell-beingの向上や地域づくりを支援できると考えられた。

KEY WORDS : learning, older people, volunteer activities

### I. はじめに

高齢者のボランティア活動は、社会的な貢献活動である。社会的な貢献活動へ参加することは、介護や認知症の予防、生きがい創出といった高齢者自身による影響をもたらす<sup>1)</sup>とされており、高齢者の健康寿命の延伸に資すると考えられるため、ボランティア活動を促進することは重要である。一方、近年は、身近な地域において誰もが安心して生活を維持できるよう、地域住民相互の支え合いによる共助の取組を通じて、高齢者を含め、支援が必要な人を地域全体で支える基盤を構築することの必要性が高まっている<sup>2)</sup>。高齢者が身近な地域で行うボランティア活動は、地域づくりにつながる活動としても重要であると考えられる。また、高齢者の社会参加について、高齢社会対策大綱<sup>3)</sup>では、高齢社会において価値観が多様化する中で、社会の変化に対応して絶えず新たな知識や技術を習得する機会が必要とされ、高齢者が地域社会において活躍できるよう高齢期の学びを支援する必要性が述べられている。高齢者が学ぶことができる場を地域社会で提供していくことが課題である。

ボランティア活動は、高齢者にとって今後の自分自身の健康や生き方を考える学習になっている<sup>4), 5)</sup>ことが明らかにされている。また、高齢者がグループでボランティア活動を行うことにより、認識や行動が愛他的になる<sup>6)</sup>ことや活動による交流を通して人間関係が広がる<sup>6), 7)</sup>ことが明らかになっている。高齢者は、他者とボランティア活動を行うことにより、自分自身の健康や他者との関わり方などを考えたり学んだりすること、すなわち学習が行われ、個人の健康や他者・地域に対する認識と行動、グループの関係性が変化していると考えられる。しかし、学習の要素やその過程、学習と高齢者個人・グループの変化の関係性は明らかにされていなかった。そこで筆者ら<sup>8)</sup>は、学習と学習による高齢者個人・グループの変化を明らかにするために、質的システムティックレビューを行った。その際は、3つの要素「相互関与」「共同の営み」「共有領域」を用いた創発的構造であり、実践コミュニティへ参加し、会員同士で相互に関わりながら活動することにより、会員たちおよび実践コミュニティが「活動の意味」を見出していく過程を学習としてとらえることができる状況的学習論を用いた<sup>9)</sup>。その結果、ボランティア活動における高齢者グループの学習を

構造的にとらえ、高齢者の健康づくりや地域づくりに波及する可能性があることを明らかにできたが、学習の過程や高齢者個人とグループの変化の関係性、非言語的な「相互関与」や暗黙知は明らかにならなかった。

そこで、本研究では、先行研究を参考とし、実際のボランティア活動より高齢者グループの学習と学習による高齢者個人・グループの変化を導出できると考えた。そのことにより、高齢者のWell-beingの向上や地域づくりを促進する学習の支援に寄与できると考えられる。

## II. 研究目的

本研究の目的は、高齢者グループのボランティア活動における学習の様相と学習による高齢者個人・グループの変化を明らかにし、ボランティア活動における高齢者グループの学習の支援のあり方を検討することである。

## III. 用語の定義

- ・高齢者：地域社会でボランティア活動に参加する高齢者。
- ・相互関与：ボランティア活動における多様な交流、共同で活動する関係、相互交流によるグループの維持。
- ・共同の営み：活動の目的・目標、関心、ルールや方針。
- ・共有領域：共有されている知識や技術、方法、道具、行動、会話、考え方。
- ・活動の意味：活動の継続によって新たに見出した意味。
- ・学習：状況的学習論を参考にし、高齢者同士で相互交流しながら活動の目的や目標を共有し、共通の方法や考え方で活動を行うことにより、高齢者個人およびグループが活動の意味を見出す過程。
- ・個人の変化：高齢者個人の健康や他者・地域に対する認識と行動が変化すること。
- ・グループの変化：グループの機能や関係性、活動の形態が変化すること。

## IV. 研究方法

### 1. 研究デザイン

本研究は、高齢者グループのボランティア活動におけるできごとや現象をありのままに記述することを目指すため、記述的質的研究<sup>10)</sup>を用いる。

### 2. 研究参加者と選定方法

研究参加者は、保健師の関わりがあり、ボランティア活動を行っている高齢者グループとした。選定基準は、居住する地域で定期的かつ継続的に相互交流のあるボラ

ンティア活動を行っているグループとし、支援される住民には、高齢者を含んでいることとした。また、ボランティア活動および面接が可能な健康状態であり、日本語でのコミュニケーションが可能な者とした。

研究参加者の選定は機縁法を用い、研究者が教育研究活動によって把握しているグループの代表者2名に研究参加候補者の選定・紹介の協力を依頼し、協力を得た。

### 3. データ収集方法

データは、面接調査により収集した。面接調査は、個別に半構造化インタビューを実施した。面接では、基本情報として年代、ボランティア活動を行っているグループの人数、活動日数、活動継続年数、活動内容、活動における役割を聴取した。ボランティア活動については、先行研究<sup>8)</sup>を参考に、活動を始めたきっかけや活動を行う目的と目的の変化、活動における人間関係の構築方法、資源の共有方法、活動継続による個人・グループの変化、活動の意味を聴取し、研究参加者の許可を得てICレコーダーに録音し、逐語録を作成した。また、面接調査にあたっては、高齢者を対象としたボランティア活動を各グループ1回、参加観察を行い、インタビュー内容の理解に努めた。

### 4. 分析方法

面接調査によって得た基本情報は、項目別にまとめた。学習の様相をとらえるために、まず、事例ごとに逐語録を精読し、本研究における定義に照らし合わせて「相互関与」、「共同の営み」、「共有領域」、「活動の意味」および「高齢者個人」の変化、「高齢者グループ」の変化について語られている部分を文脈のまとまりで取り出し、データとした。全事例についてデータを抽出した後、学習の要素は、全事例のコードを集め、要素毎に意味の類似性によって分類整理してカテゴリを生成し、カテゴリの関係性がわかるように記述した。その後、実践コミュニティの発展段階<sup>11)</sup>を参考に時間的な経過にそってプロセスがわかるように配置した。また、「高齢者個人」の変化、「高齢者グループ」の変化については、意味の類似性に基づき分類整理し、カテゴリを生成した。各カテゴリの関係性や変化について、データの意味を考えながら検討して配置し、記述した。

なお、分析内容の妥当性を確保するために、共同研究者間でデータの内容および分析のプロセスを確認した。

## V. 倫理的配慮

調査は、グループの代表者に研究の趣旨を説明し、承諾を得た後に研究参加候補者の選定を依頼、研究者より参加者に研究目的・方法、協力依頼内容、倫理的配慮等

を説明し、研究協力を依頼した。協力の諾否は、1週間以内の研究者への回答とし、グループ代表者からの強制力に配慮した。千葉大学大学院看護学研究科倫理審査委員会の審査・承認を得て実施した（承認番号R2-34）。

## VI. 結果

### 1. 研究参加者の概要

研究参加者は、Iグループ5名、IIグループ7名の計12名（男性2名：女性10名、60歳代9名、70歳代3名）であった（表1）。面接は1人1回、面接時間は33～90分、平均67分であった。調査期間は、2021年2月～3月であった。

### 2. ボランティア活動における高齢者グループの学習

ボランティア活動における高齢者グループの学習の要素は、177のデータから「相互関与」は9カテゴリ、「共同の営み」は5カテゴリ、「共有領域」は4カテゴリ、「活動の意味」は6カテゴリに整理された（表2）。また、各要素間でみられた関連を図1に示した。

分析結果を以下に示す。アルファベットは、表1の事例に対応し、【カテゴリ】、〈サブカテゴリ〉、データを作成した【逐語録】で示す（以下、同様）。

#### 1) 相互関与

高齢者グループでは、【接し方の工夫によるメンバー・支援対象者との関係の構築】に努めていた。このカテゴリは、9名（B, C, D, F, G, I, J, K, L）か

ら得られた。F氏は、「[ちょっと近況を話して]とか、あえて私はつくっているようにしています。（中略）やっぱりお話していると、こんな面もあったんだよなっていう気付きがあるじゃないですか」と語っていた。グループのメンバーは、活動を通して【メンバーがお互いに尊重し協力し合う関係】を保っており、10名（A, B, C, D, E, F, G, I, J, K）から得られた。D氏は、「[2カ月、3カ月と来れない時期もあったんですけど、それこそ手順も忘れてしまったりするんですけど、（他のメンバーが）よく見て「そこ、そうよ」とかって言うてくださったりするのですね」と語った。活動の中では、【知識・技術・情報の共有】（6名：C, D, E, I, K, L）や〈メンバー全員で集まり活動内容を相談する〉、〈支援対象者も交えた雑談の中で活動内容を相談する〉など様々なかたちで【メンバー・支援対象者との活動内容の相談】（4名：H, J, K, L）を行うだけでなく、【メンバー同士で折り合いをつけた活動】（5名：F, H, I, J, K）も行われていた。I氏は、「1つの活動で、ちょっと嫌だと思って、「私は面白くないからしたくないんだ」って別の方（メンバー）に言ったら、「でもそんな言い方をしないで、これは方向的には（I氏とは）ちょっと違うかもしれないけれども、やることは地域にとっては大事なことから、やっぱり飲み込まなきゃ駄目よね」というふうに別のスタッフさんから教えていただいた」と語った。また、【支援対象者

表1 対象者の属性

	参加者	年代	性別	参加頻度	継続年数	役割	活動およびグループの特徴
Iグループ	A	60代	女性	週1回	5年	サロンの受付 活動のサポート	認知症を有する高齢者および家族のためのサロンの運営している。サロンでは、食事をとりながら交流したり、悩み事を相談したりして過ごしている。また、農作業、衣服の縫製、そば打ちなど利用者が得意な作業も行っている。担当地区の保健師が時々、健康教育・相談を行うこともある。
	B	60代	男性	不定期	5年	活動のサポート	
	C	60代	女性	週1回	5年	サロンの企画・運営 活動のサポート	
	D	70代	女性	月1回	5年	活動のサポート	
	E	60代	女性	月1回	5年	活動のサポート	
IIグループ	F	60代	女性	週2回	6年	活動のサポート 活動の企画・運営のサポート	高齢者の介護予防のための体操教室、地域の小中学校への出前授業（高齢者体験など）、本の朗読会等を行っている。体操教室では、血圧測定（希望者は健康相談を行うこともある）や栄養・健康に関するミニ講話も行っている。グループの活動に携わっていた看護職（保健師、看護師）が退職後にグループのメンバーとなって活動している。
	G	60代	女性	週1, 2回	4年	活動のサポート	
	H	60代	女性	週1, 2回	7年	活動のサポート	
	I	60代	女性	週2回	4年	活動のサポート	
	J	70代	女性	週3回	10年以上	活動のサポート メンバーのサポート 活動の企画・運営のサポート	
	K	60代	男性	月2, 3回	10年以上	活動のサポート メンバーのサポート 活動の企画・運営のサポート	
	L	70代	女性	週5回	10年以上	活動の企画・運営 活動のサポート	

表2 ボランティア活動における高齢者グループの学習の要素

要素	カテゴリ	サブカテゴリ	事例
相互関与	接し方の工夫によるメンバー・支援対象者との関係の構築	支援対象者を知るために一歩引いて観察する	I, J
		支援対象者の特徴に合わせて接する	C, D, K
		雑談の中からメンバーの得意なことや嫌なことを知っていく	C, G, L
		支援対象者とお互い分かり合うために会話する機会をつくる	B, I, L
		支援対象者の活動にあまり手を出しすぎないようにする	F, K
	メンバーがお互いに尊重し協力し合う関係	雑談の中からメンバーに自分を知ってもらう	C, F
		メンバーと活動について助言・協力し合う	A, C, D, E, J
		他のメンバーの参加者への接し方を観察して学ぶ	A, B, E, G, I
	知識・技術・情報の共有	メンバーそれぞれの立場や意見を尊重して活動する	B, F, K
		メンバー同士で参加者の情報を共有する	C
		日常に役立つ健康や食事について情報を交換する	D, E, I, L
	メンバー・支援対象者との活動内容の相談	活動内容に関する知識や技術を伝える	K
		メンバー全員で集まり活動内容を相談する	H, J
		支援対象者も交えた雑談の中で活動内容を相談する	L
	メンバー同士で折り合いをつけた活動	何気ない雑談の中で活動内容を相談する	K, L
		活動の中心となるメンバーが集まり活動内容を相談する	H, K
		メンバー同士で活動に対する意見の折り合いをつける	H, I
	支援対象者からの学び	メンバー間で参加する日を調整して活動する	F
		経験の長いメンバーやグループの代表者がメンバーの得意なことをもとに役割を検討する	F, I, J, K
		支援対象者からこれからの生き方を学ぶ	F, H, J
援助対象者から前向きな姿勢の重要性を学ぶ		C, D, G	
ボランティア活動の意欲が高まる交流	支援対象者から理想の年齢の重ね方を学ぶ	F, I	
	支援対象者から活動方法を学ぶ	G, J, L	
ボランティア活動の意欲が高まる交流	支援対象者との関わりから活動意欲が沸く	C, E	
	メンバーとの交流から個人の活動意欲が高まる	B, I, H	
	支援者・支援対象者の関係を越え、一緒に取り組む相手と認識する	F, G, H	
ボランティアコミュニティの関係性の深化	愚痴や家庭の事、心配事を話せるようになる	D, E, I, J	
	メンバー同士で遠慮せずに接することができるようになる	A, D, E, K	
グループ活動を継続させる検討	グループ活動を継続させるための検討を行う	B, J	
共同の営み	活動の運営方針	グループの目標や理念を共有する	H
		活動を運営する計画・ルールを決める	A, H, I, L
		各メンバーの役割を決める	H
	高齢者の健康とQOLの向上を目指す方針	高齢者の生活の質を高める支援を行う	I, L
		高齢者の健康づくりを行う	L
	目的である地域における高齢者の仲間づくり・居場所づくり	高齢者が地域で仲間づくりを行うことを目的とする	L
		高齢者の地域の居場所をつくる	C, G
自己の能力の活用と向上	活動を通して技術を習得する	D, E	
	自分自身の能力・技術を活動に活かす	F, H	
活動を通して社会とのつながりと貢献の希求	活動を通して地域社会に貢献したい 活動が社会と関わるきっかけとする	A, F, H, L F, G, I	
共有領域	活動の質を向上させる知識・技術・ツール	各支援対象者に合わせた接し方	B, C
		活動の質を向上させるための知識と道具	H, L
		活動を円滑に行うための資料	H, K
	日常生活に役立つ知識・情報	食事に関する知識や情報	D, I, L
		様々な疾患や薬に関する知識や情報	L
	メンバー同士でお互いの考え・動きを察した上での役割の調整	メンバー同士でお互いの考え・行動を把握して活動を行う	C, E
他のメンバーの考えや動きを察して阿吽の呼吸で自分の役割を調整する		C, E, G, I	
活動の中で心掛けている考え方	支援対象者のために支援するという考え	B, C, J	
	活動の場はメンバー・支援対象者のみんなで創り上げているという考え	C, G, H	
	メンバー・支援対象者を含めた活動の場全てを大事にしたいという考え	C	
活動の意味	自分にとっての居場所	いつ行っても良い楽しい居場所である	B, C, D, E, F, J
		自分を理解してくれる場である	F
	自分の生活の一部	活動への参加が習慣となっている	B, C, G
	地域社会における役割の付与	日常生活において力を注ぐ役割ができる	B
	学びを継続できる場	他者から学び続けられる場である	D, F, G, H
	今後の人生に影響を与える活動	活動は自分の生き方を変えた	B, C, L
人生の在り方を教え示してくれる		C, H, L	
地域における支え合いの関係の構築	支援者から支援対象者への自然な移行を地域で支える	E	
	年月を経てもメンバー同士の関係をつなげ続ける	C	



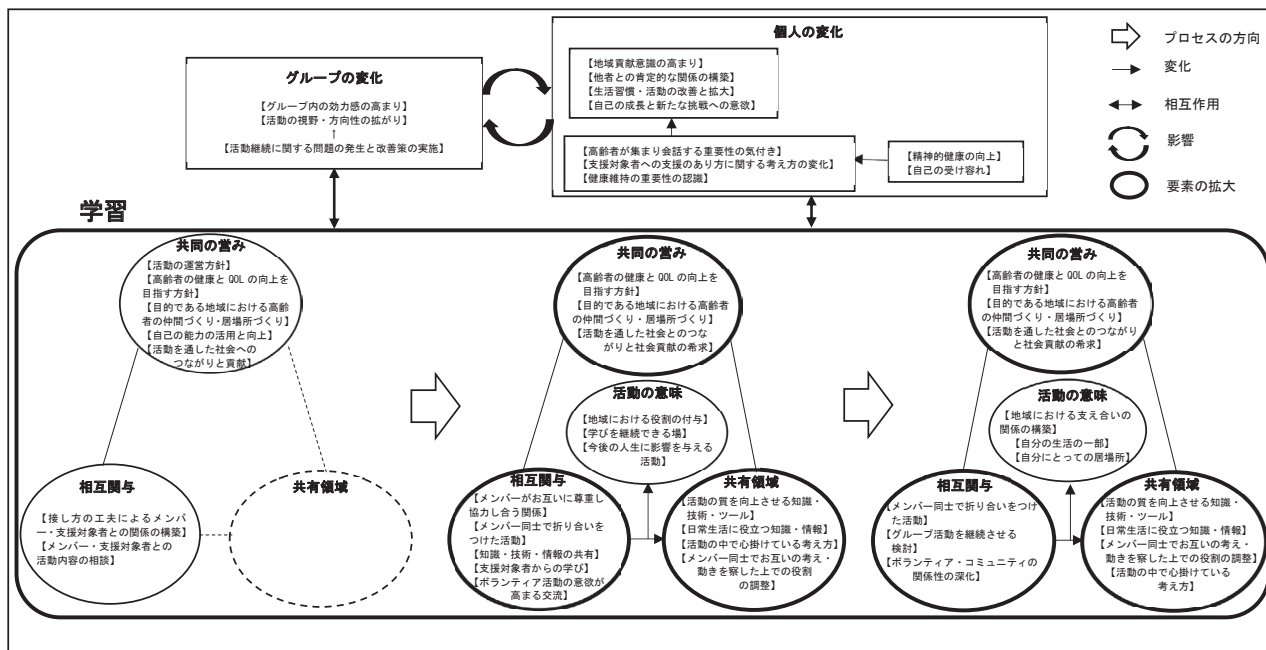


図1 ボランティア活動における高齢者グループの学習と学習による高齢者個人・グループの変化

からの学び」（8名：C, D, F, G, H, I, J, L）がみられた。メンバーや支援対象者との関わりを通して【ボランティア活動の意欲が高まる交流】（5名：B, C, E, H, I）となっていた。これらのメンバー・支援対象者との相互交流により、【ボランティアコミュニティの関係性の深化】（9名：A, D, E, F, G, H, I, J, K）がみられた。G氏は、[長く関わっていると、ボランティアグループ、参加者グループということではなくて（中略）ごく自然になじんで、多分一体化して、一緒に活動するからきっと続くのかなって]と語った。また、グループ内の関係が深まり、活動を継続する中では問題が生じることもあり、【グループ活動を継続させる検討】2名（B, J）もされていた。

## 2) 共同の営み

高齢者グループでは、〈グループの目標や理念を共有する〉、〈活動を運営する計画・ルールを決める〉などの【活動の運営方針】（4名：A, H, I, L）に基づいて活動をしていた。活動は、〈高齢者の生活の質を高める支援を行う〉、〈高齢者の健康づくりを行う〉という【高齢者の健康とQOLの向上を目指す方針】（2名：I, L）や【目的である地域における高齢者の仲間づくり・居場所づくり】（3名：C, G, L）など、高齢者の支援に焦点を当てた目的と【自己の能力の活用と向上】（4名：D, E, F, H）や【活動を通した社会とのつながりと貢献の希求】6名（A, F, G, H, I, L）などの自分自身に焦点を当てた目的など様々であっ

た。L氏は、[社会に何かをしたい、ボランティア活動ということに関しても興味があって、何かしたいというふうには思ってた]と語った。

## 3) 共有領域

高齢者グループでは、〈各支援対象者に合わせた接し方〉など【活動の質を向上させる知識・技術・ツール】（5名：B, C, H, K, L）や〈様々な疾患や薬に関する知識や情報〉など【日常生活に役立つ知識・情報】（3名：D, I, L）を共有していた。そして、【メンバー同士でお互いの考え・動きを察した上での役割の調整】（4名：C, E, G, I）が行われていた。また、グループ内で共有している【活動の中で心掛けている考え方】5名（B, C, G, H, J）は、時間の経過とともに〈支援対象者のために支援するという考え〉から〈活動の場はメンバー・支援対象者のみんなで創り上げているという考え〉に変化していた。H氏は、[ここ（グループ）に来て日の浅い人、長い人、いろいろいらっしやるけれども、それぞれがここをつくっているメンバーであるっていうことを感じます]と語った。

## 4) 活動の意味

ボランティア活動を行う高齢者は、活動を【自分にとっての居場所】（6名：B, C, D, E, F, J）や〈活動への参加が習慣となっている〉という【自分の生活の一部】（3名：B, C, G）、〈日常生活において力を注ぐ役割ができる〉という【地域社会における役割の付与】（1名：B）だけでなく、〈他者から学び続けられ

る場である」という【学びを継続できる場】（4名：D, F, G, H）や【今後の人生に影響を与える活動】（4名：B, C, H, L）など自分自身の人生に良い影響を与えるものとして意味を見出していた。また、グループにとっては、〈支援者から支援対象者への自然な移行を地域で支える〉といった【地域における支え合いの関係の構築】2名（C, E）として意味を見出していた。E氏は「お手伝いしながら、長い間に、今度は逆に、参加する側にもなるっていうのが理想だな」と語った。

#### 5) 学習の各要素の関連

高齢者グループでは、「相互関与」として【接し方の工夫によるメンバー・支援対象者との関係の構築】が行われていた。F氏のように「まずは自分を知ってもらわないと相手も見せてくれないと思うため、普段、ご飯を食べて色々な話をしながら、自分を知ってもらうことを心掛けている」結果、「共有領域」として「参加者の様子を見ながら、自分が新しい参加者と話していれば手があいた人は違う参加者と話してくれてたり（中略）あうんの呼吸というか、初めて来て孤独で寂しいのではないかなどは、みんなが思っているから特別にこういう人のときにはこうしようとかはない」（C氏）など【メンバー同士でお互いの考え・動きを察した上での役割の調整】が成り立っていた。また、「相互関与」として【知識・技術・情報の共有】や【支援対象者からの学び】がみられた。このような交流によって、「共有領域」として【活動の質を向上させる知識・技術・ツール】や【日常生活に役立つ知識・情報】が成立し、その結果、「自分を学ばせてくれる場のような気がしており、「活動の場は自分自身の生涯学習センターです」と言っている」（H氏）など【学びを継続できる場】や「年をとって、残った人生をどうやっていこうかと考えたときにその方向性を示してくれる」（C氏）など【今後の人生に影響を与える活動】と「活動の意味」を形成していた。これらの多様な「相互関与」によってさらに【ボランティアコミュニティの関係性の深化】がみられ、「共有領域」として〈活動の場はメンバー・支援対象者のみんなで作っているという考え〉が成り立っていた。このようにメンバーと支援対象者の関係性に変化があることから【地域における支え合いの関係の構築】として「活動の意味」を見出していた。

以上より、ボランティア活動における高齢者グループの学習は、【接し方の工夫によるメンバー・支援対象者との関係の構築】を試みながら【高齢者の健康とQOLの向上を目指す方針】をもとに、【メンバー・支援対象者との活動内容の相談】や【支援対象者からの学び】を

通して【活動の中で心掛けている考え方】や【活動の質を向上させる知識・技術・ツール】、【日常生活に役立つ知識・情報】を共有することで、やがて〈支援者・支援対象者の関係を超越、一緒に取り組む相手と認識する〉ようになり、活動を通して【自分にとっての居場所】や【学びを継続できる場】、【今後の人生に影響を与える活動】、【地域における支え合いの関係の構築】として意味を見出す過程であった。

### 3. ボランティア活動における学習を通じた高齢者個人・グループの変化

#### 1) 高齢者個人の変化

ボランティア活動による学習を通じた高齢者個人の変化は、72データから24サブカテゴリ、9カテゴリに整理された（表3）。以下に結果を説明し、カテゴリ間の関係を図1に示す。

高齢者は、活動による学習を通して【自己の受け入れ】（6名：C, F, H, I, J, K）や【精神的健康の向上】（8名：B, D, F, G, H, I, K, L）がみられた。その結果、【健康維持の重要性の認識】（7名：B, C, E, F, H, J, K）や【高齢者が集まり会話する重要性の気付き】（3名：C, D, J）、【支援対象者への支援のあり方に関する考え方の変化】（3名：B, H, J）がみられた。J氏は「参加者にやってもらうのが一番っていう思いですよ。それを見守ればいいのかな」と語った。高齢者はさらに【自己成長と新たな挑戦への意欲】（4名：F, I, K, L）が沸いたり、【生活習慣・活動の改善と拡大】（5名：B, J, I, K, L）がみられたりした。また、〈他者に共感するようになった〉などの【他者との肯定的な関係の構築】（4名：A, B, E, L）や【地域貢献の意識の高まり】（2名：B, C）など他者や地域社会へも意識が向けられるようになっていた。B氏は、「自分の性格からいったら、お年寄りと接することは自分には向かなくなって思ってたんですけど（中略）一生懸命、頑張ってる方を、何とかちょっとでも応援っていうか何かできたらいいかな」と語った。

#### 2) 高齢者グループの変化

ボランティア活動による学習を通じた高齢者グループの変化は、10データから5サブカテゴリ、3カテゴリに整理された（表4）。以下に結果を説明し、カテゴリ間の関係を図1に示す。

高齢者グループでは、【活動継続に関する問題の発生と改善策の実施】（3名：B, H, J）をしていた。様々な工夫をしながら活動を継続することにより、「一緒に何か活動をやったということで、上手くいってもい

表3 ボランティア活動における学習を通じた  
高齢者個人の変化

カテゴリ	サブカテゴリ	事例
自己の受け容 れ	自己肯定感を得る	E,H,J
	自己理解が深まる	F
	自分らしい今後の生き方を考えるよ うになる	C,K
	自己効力感を得る	H,I,J
	加齢を受け止められるようになった	H,I
精神的健康の 向上	他者の役に立っていると感じるよ うになる	I
	幸福感・満足感を得るよ うになる	D,F,I,K,L
	生きがい・やりがい が生まれた	I,K
	考え方・感じ方が前向き になった	B,G,H,I
健康維持の重 要性の認識	身体的な健康を維持する重要性に気付 く	B,C,E,F, H,J,K
高齢者が集ま り会話する重 要性の気づき	高齢者が来る場があることが大事だ と思うようになった	D,J
	多くの人に会ったり会話をしたりするこ とは精神面の維持に大事だと思 うようになった	C,D,J
支援対象者へ の支援のあり 方に関する考 え方の変化	責任をもって支援対象者に 関わろうと思うよ うになった	B,H
	肩肘張らずに支援対象者 に向かい合おうと思 うようになった	B,H
	支援対象者に必要なこと を一緒に考えていき たいと思うよ うになった	B,H
	支援対象者なりのやり方 でできるように見守 ることが大事だと思 うよ うになった	B,J
自己成長と新 たな挑戦への 意欲	人として成熟する	F,I,L
	新たなことに挑戦したい と思うよ うになった	F,I,K
生活習慣・活 動の改善と拡 大	健康を維持するために生活 習慣を変えた	B,J,K,L
	日常生活における活動の 範囲が広が った	I,L
他者との肯定 的な関係の構 築	他者に共感するよ うになった	L
	日常生活における他者 との関わり合いが 広がる	A,B,E
地域貢献の意 識の高まり	地域で新たな役割を果 たしたい気持ちが 芽生える	B,C
	活動の場でさらに役立 つようになりた いと思 うよ うになった	B

表4 高齢者グループの変化

カテゴリ	サブカテゴリ	事例
活動継続に 関する問題 の発生と改 善策の実 施	活動の継続により新 たな問題が生 じるよ うになる	B,J
	活動方法と内容を工夫 するよ うになる	H,J
グループ内 の効力感 の高まり	活動を一緒に行うこ とによりメン バー内 の団結力 が高まる	L,G
	支援対象者も一緒 に活動を創 り上げる こと でグル ープ内 の効力 感が高 まる	L
活動の視野・方 向性の 拡がり	様々な能力を持つ メンバー が集まる こと で活動 の幅が 広がる	I

かなくても、グループの団結力ができてくるような気がする] (L氏) など【グループ内の効力感の高まり】(2名: L, G) がみられ、さらに [代表者や経験の長いメンバーがメンバーの適材適所を見つけながら、人を巻き込んでいくことによって、グループがだんだんと大きくなっていったり、活動の幅が広がっていったりしている] (I氏) など【活動の視野・方向性の拡がり】(1名: I) がみられるようになっていた。

## VII. 考 察

### 1. ボランティア活動における高齢者グループの学習の様相

高齢者グループで「相互関与」として行われた【接し方の工夫によるメンバー・支援対象者との関係の構築】では、〈雑談の中からメンバーの得意なことや嫌なことを知っていく〉や〈雑談の中からメンバーに自分を知ってもらおう〉など雑談を通してお互いを知り合うことが試みられていた。また、【メンバー・支援対象者との活動内容の相談】も〈何気ない雑談の中で活動内容を相談する〉や〈支援対象者も交えた雑談の中で活動内容を相談する〉など正式な話し合いの場だけではなく、日々の活動で行われる雑談中に自然に行われていた。雑談について、川名<sup>12)</sup> は、信頼が保証され、安心感がある、相互行為の場であるとし、自分の実践のヒントとなるアイデア(知識)を共有するための相互行為を発展させることができる会話と述べている。高齢者グループのメンバーおよび支援対象者は、活動中の自然な交流である雑談を通して関係性が構築されるだけでなく、活動に関する知識を共有していると考えられる。このような「相互関与」によって「共有領域」が成り立ち、【活動の質を向上させる知識・技術・ツール】や【日常生活に役立つ知識・情報】、【活動の中で心掛けている考え方】などの知識や考え方が共有され、【メンバー同士でお互いの考え・動きを察した上での役割の調整】がグループ内の行動として共有されるようになったと考えられた。さらに、ボランティアの担い手と受け手が良好な関係を築くことについて、Lesterら<sup>13)</sup> は、受け手自身も自尊心と自律性を保つことができる互酬的な関係が重要であることも明らかにしている。高齢者グループでは、活動の中で【支援対象者からの学び】といった交流もみられ、支援者と支援対象者が互酬的な関係を築き、やがて支援の担い手・受け手の関係を越えて一緒に取り組む相手と認識するようになったと考えられた。

また、実践コミュニティにおける知識について、野中<sup>14)</sup> は、多くの知識は暗黙知のまま、人の信念や熟練などに



埋め込まれているため、その知識がダイナミックな文脈の中で生き生きと立ち現れてくるためには、人と人との間で文脈を共有しなければ暗黙知は移転されないとされている。高齢者グループでは、〈活動内容に関する知識や技術を伝える〉などの直接的な【知識・技術・情報の共有】だけではなく、〈他のメンバーの参加者への接し方を観察して学ぶ〉という間接的な交流を通して「共有領域」であり暗黙的な〈各支援対象者に合わせた接し方〉や【活動の中で心掛けている考え方】が成り立っていると考えられる。

Wenger<sup>15)</sup>は、「相互関与」「共同の営み」「共有領域」の3つの要素を並行して発展させることが重要としており、各要素が発展し、「活動の意味」を見出すことにより学習が発展すると考えられた。

## 2. ボランティア活動における学習を通じた高齢者個人の変化と高齢者グループの変化の関係性

ボランティア活動における学習を通して、高齢者個人およびグループは、新たな価値観や問題を主体的に解決するための力の獲得、すなわちエンパワメントが促されたと考えられる。

個人のエンパワメントについて、麻原<sup>16)</sup>は、他者との交流の中で得られる安心感、自己効力感、有能感、自尊感情などによって、新しい価値観の獲得や問題解決方法の習得と実践などエンパワーのプロセスが漸進していくことを示唆している。I氏は、[社会に対しても、もっとやれることもあるとか自分も社会の一員だと思えるような気持ちになった]という〈自己効力感を得る〉など【自己の受け容れ】やD氏のように[楽しみながら自分の人生にプラスになるようなことも教えてもらい、家族やみんなが喜んでくれるため充実感がありますよね]といった【精神的健康の向上】が起こった結果、【健康維持の重要性の認識】や〈責任をもって支援対象者に関わろうと思うようになった〉などの【支援対象者への支援のあり方に関する考え方の変化】、〈高齢者が来る場があることが大事だと思うようになった〉などの【高齢者が集まり会話する重要性の気付き】といった新しい価値観を獲得したと考えられる。さらに【自己成長と新たな挑戦への意欲】やK氏の[毎日、朝起きた時に小さな運動を続けるようにしている]のような【生活習慣・活動の改善と拡大】など問題を解決するための方法を実践するようになったと考えられる。

集団のエンパワメントの評価指標について、麻原<sup>16)</sup>は、積極的、凝集性、他組織とのネットワークの発展などをあげている。高齢者グループでは〈活動の継続により新たな問題が生じるようになる〉ことで[経験が長い

メンバーは見守り、経験の短いメンバーがやったという自信が大事だと思い、今、マニュアルづくりが絶対必須だと思っている] (K氏) など【活動継続に関する問題の発生と改善策の実施】をすることにより、【グループ内の効力感の高まり】や【活動の視野・方向性の拡がり】が変化としてみられたことから、グループもエンパワーされたと考えられる。

また、清水<sup>17)</sup>は、個人レベルのエンパワメントと組織レベルのエンパワメントは相互に関連があるとしている。個人のエンパワメントについて、井出<sup>18)</sup>は、地域における高齢者の相互扶助的な交流が高齢者個々をエンパワーすることに影響しており、高齢者自身の交流によって属する集団や地域社会そのもののパワーも向上する可能性を示唆している。グループに所属する高齢者がメンバーや支援対象者と交流する中で〈多くの人に会ったり会話したりすることは精神面の維持に大事だと思うようになった〉などエンパワーされることによって、グループのエンパワメントが促されたと考えられた。組織のエンパワメントについて、高林<sup>19)</sup>は、信頼関係の形成と維持がポイントであり、活動について意見交換する場を設け、個々の意見を尊重し調整することで、自分自身が仲間として認められていると感じ、さらに仲間との関係づくりが深まるとしている。本研究の高齢者グループでは、活動の継続により問題が生じると検討を行い、改善策を実施していた。このような取り組みによって高齢者個人は【自己の受け容れ】や【精神的健康の向上】が起こり、さらにグループでは【グループ内の効力感の高まり】が生じたと考えられる。これらのことから、高齢者個人と高齢者グループが相互に影響することで、ともにエンパワメントが促進されたと考えられた。

## 3. ボランティア活動における高齢者グループの学習と学習による高齢者個人・グループの変化

高齢者は、ボランティア活動を継続し、学習が発展することにより、活動を【自分にとっての居場所】として意味を見出していた。居場所が高齢者にもたらす効果について、濱田<sup>20)</sup>は、[人生の統合を促進する]こと、[心身の健康を保つ]こと、[地域の活性化につながる]ことを明らかにしている。活動を居場所と意味づけることによって、〈自分らしい今後の生き方を考えるようになる〉、〈自己効力感を得る〉などの【自己の受け容れ】や〈考え方・感じ方が前向きになった〉などの【精神的健康の向上】、〈健康を維持するために生活習慣を変えた〉などの【生活習慣・活動の改善と拡大】、〈地域で新たな役割を果たしたい気持ちが芽生える〉などの【地域貢献の意識の高まり】といった変化を高齢者個人にも



たらしたと考えられた。また、高齢者個人は〈他者に共感するようになった〉など【他者との肯定的な関係の構築】がみられたが、Lesterら<sup>13)</sup>は、ボランティアの担い手と受け手が良好な関係を築くためには、担い手に信頼されるように共感を表現できる能力や友好的な話し方をできる会話スキルがあることが重要であると述べている。活動を継続し、〈各支援対象者に合わせた接し方〉を共有することによって、良好な関係が築かれ〈支援者・支援対象者の関係を超越、一緒に取り組む相手と認識する〉などの【ボランティアコミュニティの関係性の深化】が促進されたと考えられた。グループでは〈活動の継続により新たな問題が生じるようになる〉ことで〈活動方法と内容を工夫するようになる〉といった【活動継続に関する問題の発生と改善策の実施】を行うようになることによって「共有領域」である【活動の質を向上させる知識・技術・ツール】の共有がさらに深まったと考えられた。

活動を継続して学習が発展し、「地域における役割を与えるもの」や「居場所」として「活動の意味」を見出すことによって、高齢者は生きがいや満足感を持ち、身体的な健康を維持するための行動に取り組むようになっていた。すなわち、学習が発展し、「活動の意味」を見出すことによって高齢者のWell-beingの向上が促進されると考えられた。このWell-beingの向上は、地域へ貢献する意識の高まりへ作用し、それがまたWell-beingへと作用する様相が見られた。これらより、学習が発展する過程においては、活動の意味を見出すことが重要であり、学習における3つの要素の拡大と「活動の意味」を見出す支援をすることにより、高齢者のWell-beingの向上や地域づくりを支援できると考えられた。

## VIII. 研究の限界と課題

本研究は、ボランティア活動における高齢者グループの学習と学習による高齢者個人・グループの変化、および支援のあり方を検討した。今後は、高齢者グループのボランティア活動を支援する保健福祉関係者の意見をもとに高齢者グループの学習の状況を捉えられているか検証し、学習の発展を促進するツールを開発することが課題である。

なお、本研究における利益相反はない。

## 引用文献

- 1) 内閣府：第1章 高齢化の状況，平成29年版高齢社会白書，2-87，2017。
- 2) 内閣府：第3章 令和2年度高齢社会対策，令和2年版高

齢社会白書，140-171，2020。

- 3) 内閣府：高齢社会対策大綱，[https://www8.cao.go.jp/kourei/measure/taikou/pdf/p\\_honbun\\_h29.pdf](https://www8.cao.go.jp/kourei/measure/taikou/pdf/p_honbun_h29.pdf)（検索日2021年5月26日）
- 4) 小石真子：独居高齢者サロンにおけるボランティア活動の実態，日本健康医学会雑誌，24(3)：240-241，2015。
- 5) 吉田和枝：地域ボランティア活動を行う高齢者女性の参加の意味と運営方法，日本看護学会論文集：地域看護，41：49-52，2011。
- 6) 妹尾香織，高木修：援助行動経験が援助者自身に与える効果：地域で活動するボランティアに見られる援助成果，社会心理学研究，18(2)：106-118，2003。
- 7) 板井麻衣，齋藤尚子，中山久子，櫻井しのぶ：女性高齢者がボランティアを実施する中での思い 肯定的要因と否定的要因に着目して，保健師ジャーナル，70(10)：878-887，2014。
- 8) 堀田かおり，石丸美奈：ボランティア活動における高齢者グループの学習と学習による変化—実践コミュニティの視点—：質的システムティックレビュー，千葉看護学会誌，27(1)：61-70，2021。
- 9) ジーン・レイヴ，エティエンヌ・ウェンガー：状況に埋め込まれた学習：正統的周辺参加（佐伯胖訳），産業図書，1993。
- 10) D.F.ポトリット & C.T.ベック：看護研究 原理と方法（近藤潤子監訳），第2版，医学書院，2011。
- 11) エティエンヌ・ウェンガー，リチャード・マクダーモット，ウィリアム・M・スナイダー：コミュニティ・オブ・プラクティス（野村恭彦監訳），初版，翔泳社，111-174，2002。
- 12) 川名るり：雑談に埋め込まれた社会的学習 小児病棟における「わざ」の伝達，看護研究，49(3)：226-240，2016。
- 13) Helen Lester, Nicki Mead, Carolyn Chew Graham, Linda Gask, Siobhan Reilly: An exploration of the value and mechanisms of befriending for older adults in England, *Aging & Society*, 32: 307-328, 2012.
- 14) 野中郁次郎：解説，コミュニティ・オブ・プラクティス（野村恭彦監訳），初版，翔泳社，333-343，2002。
- 15) 前掲11)
- 16) 麻原きよみ：エンパワメントと保健活動，保健婦雑誌，56(13)：1120-1126，2000。
- 17) 清水準一：ヘルスプロモーションにおけるエンパワーメントの概念と実践，看護研究，30(6)：453-458，1997。
- 18) 井出成美，佐藤紀子，山田洋子，細谷紀子，岩瀬靖子，宮崎美砂子：社会的サポートネットワークの構築につながる高齢者のエンパワメント指標の試案，文化看護学会誌，1(1)：3-11，2009。
- 19) 高林智子，大中敬子：第7章ボランティア活用に向けた環境づくり，コミュニティ・エンパワメントの技法（安梅勲江編著），第1版，医歯薬出版株式会社，79-90，2005。
- 20) 濱田莉奈，沖中由美：「高齢者の居場所」に関する国内原著論文の検討—高齢者や地域社会にとっての居場所の重要性—，ホスピスケアと在宅ケア，28(1)：119-129，2020。

EXAMINING LEARNING PERSPECTIVES AND LEARNING-GENERATED CHANGES  
AMONG INDIVIDUALS AND GROUPS IN AN OLDER PEOPLE'S GROUP  
ENGAGED IN VOLUNTEER ACTIVITIES

Kaori Hotta <sup>\*1</sup>, Mina Ishimaru <sup>\*2</sup>

<sup>\*1</sup>: Graduate School of Health Sciences, Gunma University

<sup>\*2</sup>: Graduate School of Nursing, Chiba University

KEY WORDS :

learning, older people, volunteer activities

Objective: This study aimed to clarify learning perspectives and learning-generated changes among the individuals and groups in an older people's group engaged in volunteer activities, and to consider desirable approaches to facilitate learning in the group.

Methods: Semi-structured interviews were conducted with 12 older people from a volunteer activity group that had regular and continuous interactions with their residing community, and asked about their interactions during activities, changes through continuing, and the significance of the activity.

Results: During the volunteering activities, the older people's group experienced learning. "By modifying the interaction methods," they attempted to "establish relationships between the members and support recipients" via a "mindful approach" and used "knowledge, skills, and tools to improve the quality of the activities" through "consultation on the content." "Learning obtained from the support recipients" was based on the "aim to improve the health and quality of life in older people." This will eventually lead to "going beyond the supporter-support recipient relationship and forming a relationship of engaging in activities together" and starting to perceive activities as a "place of belonging," "where one can keep learning," "something that impacts one's future life," and "building relationships of mutual support in the community."

Discussion: The results suggested that discovery of meaning in the activities was essential in the developmental process of learning, and that facilitating older people's discovery of the significance of learning while enhancing its three essential elements could promote their well-being and support community development.